

季刊 連句 第17号

昭和六十二年六月一日発行



季刊連句 第17号 目次

亀戸神社と連歌所（南柏雑記 15）	1
知らざるをたのみて	わ だ としお 2
—美術館めぐりの旅から—	
しおりの場	東 明 雅 7
「市中は」の巻 鑑賞（Ⅲ）	東 明 雅 8
脇起り追悼歌仙 春の人	佐藤 和夫 捌 14
香歩先生を悼む……佐藤和夫・香歩さんのこと……草間時彦	
<hr/>	
亀戸天神藤祭り奉納正式俳諧興行 第二十一回 猫蓑会	16
第一部 正式俳諧興行 (一)役割 (二)次第	
二十韻「遷東や」	亀戸天神社 木村恒雄氏書簡 17
第二部 二十韻 七巻	18
捌 東 明雅 内田 麻子 中田あかり 馬場 彬風	
雑賀 遊 吉沢てるよ 上月 淳子	
文台「左澤」（あてらざわ）製作雑感	五十嵐譲介 20
亀戸天神藤祭り奉納正式俳諧興行	式田 和子 21
<hr/>	
絶頂の城	22
連句教室 百韻 待春	杉内 徒司 捌 24
花野連句会 二十韻 下萌	小出きよみ 捌 26
柏連句会 二十韻 藤の房	井手 樗晴 捌 28
木の芽風	東 郁子 捌 28
<hr/>	
新刊紹介	岡本春人著「ばれんたいん」
	平井照敏著「かな書きの詩」
	吉岡梅游著「連句・俳句自選集」
	東京義仲寺連句会芭蕉庵の会著「花あんず」
	佐藤和夫著「俳句から HAIKU へ」
廣田二郎著「芭蕉と古典」	
<hr/>	
雁帛往来・連句会案内	29

# 亀戸神社と連歌所

## 南 柏 雜 記 15

雅

亀戸天神は、寛文初年（一六六一）に太宰府天神から奉遷されたものであり、そのころは東連歌所・西連歌所の二つの建物があって、將軍（家綱）も立よったという。その後、享保（一七一六―一七三五）のころまでは、存在したが、火事で消失したらしく、西連歌所のみが明和元年（一七六四）再建され、これも大破して、寛政十二年（一八〇〇）再び建てられた。この間、菅公の八百年忌・九百年忌には、特別に千句連歌が興行された外、年中行事としては、正月二日に裏白連歌神事（懐紙の表ばかり八句の連歌）、七月七日には和歌・連歌の神事、九月十三日には連歌の神事が行なわれ、また、毎月二十五日には月次の連歌会が催されたのである。

その作品も残って、懐紙の一部は整理され、「亀戸天満宮史料集」（昭和五十二年刊）に掲載されている。

さて、その西連歌所は寛政十二年の地図によれば、瓊門（中門）の前の池に架った三の橋の西側にちゃんと記されているが、寛政十三年の朱印絵図面には記載されていない

い。これはこの年御開帳があった為、その場所が葎簀張の水茶屋になっているようである。水茶屋とは路傍や境内でお茶を飲ませる茶屋のことだが、せっかくの連歌所は毀されたのか。勿体ない話だが、これは、一つには当時の連歌の衰微ぶりを物語るものであろう。幕府では流石に、正月の吉例として、いわゆる柳營連歌を幕末まで残存していたけれども、それは一般の庶民とは何の関係もないものとなっていた。俳諧・雑俳が庶民の人気をよんでいた時代に、いくらその俳諧や雑俳の祖ともいえるべき連歌の神様が天神様であると言っても、庶民を説得できなくなつたのである。

そう言えば、全国の天神様のうち、連歌道で最も權威のあつたのは、京都の北野天神で、すでに十四世紀末ごろから、千句・万句の興行がなされ、はじめは社坊公文所、続いて松梅院で興行され、その長を北野連歌会所奉行、あるいは宗匠と呼び、連歌界のオーソリテイとなつたのである。この北野の連歌会所がどうなっているか、確かめてはいないけれども、すくなくとも、正式の連歌のできる方が殆んどない今日では、たとえ建物は残っていると、有名無実のものであり、おそらくは、北野神社も、昨今の受験ブームのあおりをうけて、合格祈願の絵馬で埋まっていることだらう。神様であっても浮世の転変は避けられないとすれば、まして凡人は、亀戸天神の池畔に咲きほこる藤波の美しさに、一時の鬱を散ずるのも神の功德であらう。

# 知らざるをたのみて……………

—美術館めぐりの旅から—

わだとしお

1

縁あって地方の美術館めぐりをしています。いわゆるドサ回りというのでしょうか。楽しいのですけれどもしかし忙しい。きのう網走にいたかと思うと今日は今治。墨突くろまずの生活を続けています。そのあまりに閑暇のなさを憐まれてか、本誌に一文を草せよとの誘いをいただいた。風流韻事に思いをめぐらす時間を与えようとの温情有難くお受けしたもののさて、「連句に関することなら何でも」にはまいりました。書こうにも何にも手持ちがない。村塾閉関以来の不勉強がたたりました。

ええい、十界互具の俳諧です。美術館めぐりの間に会った「画家の言葉」に、頭のすみに生き残った俳諧師が感応することしばしばありました。これにしよう。俳諧練達の読者諸兄姉に失笑して頂くことの一片くらいは記せるかも知れない。観念の臍を噛んで以下我田引水の強弁。ま、画家と俳諧師、井戸は違っても芸術の水脈は通底している

ことでしょう。

2

—芸術家は先づ壺の様なものだと思つて見るとよい。その壺にアカデミックを段々つめ込んで口までになつたら猶山盛りにして棒でうんと押し付けるのだ。屹度底からはね返して来るだろう。その力を個性と言つてもよいのだ。はね返さないのは無個性の凡くらだ。軟教育ではだめだ。硬教育がよいのだ。

これがあの万(よろず)鉄五郎の言葉であるところが面白かった。あの、といったのはご存じの通り、万は日本のフォビズム、キュビズムの先駆者として、明治から大正を炎のように駆けぬけた前衛中の前衛画家だからです。「僕によって野蛮人が歩行を始めた」という言葉もあまりにも有名です。明治四十五年東京美術学校卒業時の卒業製作「草上裸婦」の強烈なイメージはどなたの脳裏にも残って

いることでしよう。緑の芝生に寝そべる真赤な腰巻の裸婦は、当時美校校長だった藤島武二をして絶対卒業させんとまで激怒させたが、彼を卒業させないと何年でもこういう作品が卒展に並ぶことになり困りますと誰かがとりなしたお蔭でようやく通ったというイワクつきの作品でした。この日本のフォーブの記念碑的作品は、今は東京国立近代美術館に収蔵されています。

そんな前衛中の前衛にしてアカデミックを説いているのです。アカデミックとは、俳諧でいえば古法であり、式目であり、芭蕉のことと読み変えてもいいでしょう。式目を敬遠し、芭蕉も読まず、カラッポの壺を抱いてフラフラと新しがりやの連句人たちに、この一文を読ませたいとしきりに思ったことでした。

もっとも、万の一番言いたかったことは、その後半にあるのだと思います。アカデミックを詰め尽した壺の底からはね返す個性の誕生——現代連句だって、どれほどその出現を待っていることか。返す刃で斬られているのは、式目サロンで昼寝をしているぼくたちではないでしょうか。

東北新幹線を新花巻で降りて、東京方面からいって左へ行けば宮沢賢治の記念館（中央の丘の頂上を踏めば頭上に天球図の広がる仕掛けの、あの一瞬の美しさ）。右へ道をとれば方の生まれた東和町があります。丘の裾に小さくまとまった赤・青のトタン屋根。平凡な町です。そんな日本近代美術史上の巨人がわが町から生まれたとは、町の人も永く知らず、二、三年前ようやく小さな町立美術館が建ちま

した。

生家は回送問屋「八丁」。花巻地方と遠野・釜石地方との間の農・海産物の取次をして、明治初年、一日の儲けが千円を超すといわれた豪商。八丁のおばあさんは好きなのところで汽車を呼とびめて乗ったといわれるほどの羽振りだったそうです。時移り、時代の波に立ち並んだ土蔵も次第に減り、ただひとつ残っていた最後の土蔵が、一昨年二月取り壊されて町の大通りになったと聞きました。

### 3

ぼくはかねがね、俳諧の座に連なるには、一種の哲学というところとオーバーですが、少なくとも一種の心境を持つことが必要だと思っていました。膝送りのようにして何の制約もない順づけをする、いわば座興のような場合は別ですが、昨今行なわれている競いづけ（とでもいうのでしょうか）の場合には、どうしてもそういう心境にならざるを得ません。それは、自分の生きている空間を信じて共に、それとは全く異なった空間があることを感じ、その空間の美に感じ、それら異域ともいえるべきものを含んだ所ではじめて世界が成立することを容認する心境とでもいったらいいでしょうか。要するに、異境、他者、未知と共存することによって世界はでき上がっているのだ——という信仰のようなものです。

そんなこと、あたり前じゃないかと一蹴されてしまえば

それまでですが、それをハッキリと認識することがなかなか難かしいと思います。ある時その心境に一脈かようところのある詩に出会ったことがあります。たまたま今年生誕百年を迎える、彫刻家・画家の石井鶴三の詩です。

——兄のふむ土はせまけど／ふまざるをたのみてひろし／人の知やすくなしされど／知らざるをたのみてひろしと／いにしへのひじりはいはしき／世のつねは知れるをたのみ／生きの世をおのれせまくす／知らざるをたのみてひろし／知らざるをたのめとらす／たふとしやひじりがをしへ／かしこみてをしへにはそひ／ふまざるをわれはたのみて／知らざるをわれはたのみて／世をひろく生きむ

#### 反歌

よのつねは知れるをたのむ知らざるをたのめとらすことのためと

石井は『莊子』を読み、その中の「足の地におけるやふむ。ふむといえどもそのふまざるところをたのみて、よくひろきなり。人の知におけるや少なし。少なしといえども、その知らざるところをたのみて、のち天のいうところを知るなり」という一節に感動して、この詩を作ったといえます。

これは美しいひとつの人生観ではないでしょうか。昨今いじめブームとやらで死にいく子供たちに、この境地の片鱗でも語ってやれたらと思ったりもします。自分は自分

はと鼻にかけるも、内にこもってしまっても、なあに自分の踏んでいだけの狭い土を頼みにしているようなものだ、というのでしょう。人は、まだ自分の足の踏まない広大な土を頼みにしているから、自由自在に闊歩することができ、というのです。

俳諧に水を引けば、踏まざるは他者の生きる地であり、未知であると思われず。連衆としてのぼくは絶対に一句をもって世界を表現し終ろうとは思わないでしょう。踏まざるをたのめといえます。他者の句があり、他界があり、自己の世界とそれを併せ持つことによってはじめて完成する俳諧世界のあり方。他者は更に他者呼び、さまざまに輝く複合空間の無限連鎖の上に喜遊の一大乾坤を建立することこそぼくたちの俳諧ではなかったでしょう。己れの句に拘泥することをやめよ。一処にとどまることをやめよ。踏まざるをたのめ、というのはまた更にいえば、新しい天地を求めて次から次へと進め、ということでもありません。

信州の上田市にある石井鶴三美術館で、この詩に出会いました。石井は日本画家を父に東京・下谷の仲御徒町に生まれました。ご存じ相撲ファン、チャキチャキの江戸っ子の筈なのに何故、遠い上田に美術館が建ったのでしょうか。石井は昭和四十八年八十五歳で亡くなっていますが、大正十三年から昭和四十五年までほぼ半世紀にわたってこの上田で夏の講習会を開き、地元教師たちに彫塑を教えました。その間休んだのは、昭和二十年の夏だけだったと

いいすからすごい。教えを受けた教師たち、つまり小県（ちいさがた）上田教育会の方もまた「石井先生を偲び、報いるために」館を開設した——と、実にいい話を聞かせて頂きました。

信州の山々を石井は愛し、二十代からはほとんど毎夏登っていたそうです。その山中で、石井はしばしば幻像を見るようになります。山の中に老若男女が裸で思いのままに生きている姿を見るのは楽しいと書いています。そして、一団の雲を両手にささげて山を越えるたくましい若い男の像を作ります。森の少女と名づけて溪流に水浴する若い女を作ります……。もっとも、「代表作を」と館長さんに聞いたら、示されたのは、しなびた乳房を垂らした信濃の老婆と皺だらけの老爺の一对でした。（もちろん立派な作品ですが）。

美術館は実は今は仮住い。大正の初め、ご即位を記念して建った建物だそうで今は市の図書館。老朽化とりこわしのきまったのを借りました。昔の女学校を思わせる板羽目、大きな窓、中へ入るときしぎしときしむ大きな階段、床が石井鶴三という人を思わせていっす快いのです。

#### 4

北陸本線で金沢から三つ目、松任という小さな町に行きました。ここに、前出石井鶴三の親友で、今年九十四歳なお現役で仕事をしている中川一政の美術館が建ったからで

す（昨年十月のこと）。この人もまた東京生れの東京育ちなのですが、お母さんの生地この松任を愛して作品を寄贈し、できた美術館とのことでした。

真鶴半島にアトリエを移した中川は、福浦というその漁港だけを十三年間描き続けます。赤や青のトタン屋根の今までの家が目ざわりになって、対象を箱根・駒ヶ岳に変えます。今度はここへ十六年通いつめる。基地が出来てヘリコプターの音が邪魔だといってアトリエの日まわりとバラへ帰ってきたのです。自然から受ける感動を描き続ける。ひとつの対象を凝視して倦むことを知らないこの画家の、独学独往の画も書も歌も文も、生き方そのものが人を魅了してやみません。

『庭の眺め』の一節を引かせて頂きます。画家はその中で、自分の家に集まってくる人々を私のコレクションであるといっています。

——私のコレクションは画かき、彫刻家、小説家、舞踊家、俳優といふやうな芸術関係ばかりでなく、医者もあるし、銀行の頭取もあるし、大工も百姓もある（中略、そしてそれらが）畏るべきもの、尊敬すべきもの、豪華なもの、滑稽なもの、幽美なもの、堅実

「季刊連句」のバックナンバーとり揃えてありますので御希望の向きは発行所へ御申込み下さい

なもの、いろいろの感銘を持ってゐる。テンポといったがこれらは生きものであるから、生きてゐるかぎりテンポを持ってゐる。変化を持ってゐる。その人の生活が生き生きして、実際に自然なり人生にぶつかつてゐるから話に感じがある。感じのない話くらの退屈なものはない。(中略)常識に感銘はない。みなが常識の程度に暮してゐたら、こんな退屈な世界はない。

紙数が尽きかけています。手短かに書けばここにあるコレクシヨンの眺めの、何とやらやむべき俳諧世界そのものなんだらうということです。変化のこと、感じのある話のこと。そして焼き直しさせて貰えば、常識的な句に感銘はない。みなが常識の程度の句を並べていたら、こんな退屈な俳諧はない……。

書きたいことはまだまだありますが、これら「画家の言葉」が現代連句の世界に遠くかすかにでも、蓮の糸のごとくにでもつながっていたらいいなと願ひながら筆を擱きま

す。  
なお、書き落しました。松任町は、ご存じ加賀ノ千代女の町であり、あの『地上』の島田清次郎の町です。幼年時あのベストセラーに魅せられた記憶のあるぼくは、冬田の中に孤立する一かたまりの墓群に向つて急いだのでした。

☆新刊紹介☆

☆「ばれんたいん」 岡本春人著

岡本春人氏の喜寿の記念、恋句のみの連句集。昭和六十二年二月刊。

おしげりの灯を細め細めて 春人  
星女

松風と召されさむらふ中の舞

お二人の末永い倅せを祈るものである。 平井照敏著

☆「かな書きの詩」

——蕪村と現代俳句——

著者は青山学院大学教授で、俳誌「楨」主宰。明治書院発行。二四〇〇円

☆「連句・俳句自選集」 吉岡梅游著

著書は四国丸亀の人、昭和六十二年一月刊。

☆連句集「花あんず」

東京義仲寺連句会芭蕉庵の会。昭和六十二年二月刊。発行責任者、調布市上石原二二七—九川野蓼艸氏。頒価五〇〇円

☆「俳句からHAIKUへ」 佐藤和夫著

——米英における俳句の受容——

著者は早稲田大学教授。俳句文学館国際部長。南雲堂発行。定価二〇〇〇円

☆「芭蕉と古典—元禄時代—」 廣田二郎著

芭蕉とその詩の伝統を追求した大著。明治書院発行。定価一八、〇〇〇円



# しおりの場

東 明 雅

「季刊連句」も十七号を迎えた。掲載した作品の数は正確に数えたことはないが、夥しいものに違いない。その中で忘れられぬ作品が幾つかある。その一つが創刊号の「風の二月」である。この作品にはコメントがついているから、それを読めば尚一層よく理解できるだろう。発句・脇と流石に当代一流の人のやりとりには目をみはるものがあるが、(季刊連句創刊号一〇頁〜一一頁参照)

10 梢かくれに月代の雲 照 敏

11 外厠まるめたる背のやや寒く 徒 司

12 蕎麦こねてをり婆を死なせて 照 敏

1 秋の川橋をくぐりて行くばかり 同

と、このあたりをコメントに『「外厠」から「秋の川橋をくぐりて行くばかり」の三句をこの一卷の山とみたい。述懐を思わせるこの句に、ナウ迄、何か胸につかえていたものが爽やかに吹きぬける』と言っているのは、この句だけでなく、大打越・打越・前句と変化しながら、一種のあわれ、しおりがあるからだろう。

そういえば、第十五号所載の芭蕉忌二十韻六巻のうち、米谷貞子さん捌きの一巻も表四句がしっかりして最後まで

付味、転じが利いたすばらしい作品だが、この作品にも、

1 錢龜を捕へし子より買ひ受けて 雅 代

2 長江長城中国の旅 明 雅

3 厠口あけっぱなしに風が抜け 雅 代

4 はや呆けて来し舅姑 みづゑ

の一連がある。御存じの通り、中国風の厠は明けっぱなしで、旅行する日本人は困ることが多いが、それをすぐ舅姑の呆けと取って来たところは老練であり、現代的なあわれとしおりが感ぜられるのではないか。しかも、前句「あけっぱなしに風が抜け」というのも、何か縹渺とした虚無が感じられる。

このすぐれた二連にそれぞれ外厠が出ているのは不思議だが、凡兆が芭蕉に「尿糞のこと申すべきか」と質問したのに「嫌ふべからず、されど、百韻というとも二句に過ぐべからず。一句なくてもよからん」と答えている。

現代は、あまりに便利に、贅沢になりすぎたため、外厠は、僅かに残された「しおり」の場の一つかも知れない。

平井照敏氏の説によると、日本近代の俳句の歴史は詩を重んずる因子(正岡子規―河東碧梧桐―水原秋桜子―中村草田男―金子兜太―高柳重信ら)と俳を重んずる因子(高浜虚子―石田波郷―飯田龍太―森澄雄など)の相克にあるというがこれは俳句の世界に限ったことではなく、連句の世界にも顕著にあらわれている。外厠や呆けをあわれと見、しおりと見るのが連句界の俳の因子であることは間違いない。

「市中は」の巻 鑑賞 (Ⅲ)

東 明雅

2 落の芽とりに行燈ゆりけす

3 道心のおこりは花のつぼむ時

(初春。花の苔。人情自)

(現代語訳) ある夕暮、落の臺を取りに行き、行燈をゆり消したことから、この人はその場で発心して尼となった。それはちょうど花が苔みのころのことであった。

(付心) 其人の付。また時節の付、観想の付でもある。

(付味) 人生は風前の燈というが、世の無常を観想したのが、時は春先の花の苔むころであったというのは、この人のまだ若々しい年ごろも思い合わせられ、前句の匂やかな気分に応じている。能勢朝次が「うつり」と見ているのも納得できる。

(転じ) 打越・前句に見られた若い女性の嬌態から、同じ女性でも今度は観想の句となり、一応気分は変わっているけれども、「花の苔む時」というはなやかな言葉が利き

すぎて、恋を含んだ気分はまだ転じられていない。

(補説) 打越以下の三句に、「草村」・「落の芽」・「花の苔」と引続き植物が付け出されている運びに対して、暁台が「中の句に落の芽あれば植もの三句続きたり。よく味ふべし。前二句を一章と見る法也。然れば打越の論なし。名人の手段おそるべし」(秘註七部集)と言っているのは、前二句の草村と落の芽を同一物と見てのことであろうか。ちょっと苦しい言いわけである。しかし、ここで

花の句を引き上げたのはよかった。もし、素春にして、定座に花を出すとすれば、一巻の気分は混乱を免れなかっただろう。この巻、花の定座には月を出し、いわば、花と月とを入れかえた形になったので、うまくおさまっている。

また、この句を何かの俳付と見る説もある。たとえ、説教浄瑠璃「刈萱道心」の加藤左衛門茂氏が花の薔が盃の中に散りこむのを見て無常を感じ、出家して、高野山に入



る。この句の作者凡兆は加賀金沢の生まれであるから、「隣国能登は、文化的にも風土的にも恵まれぬ僻地と映っていたと思われる」と伊藤正雄氏は指摘されているが、これは納得されるところである。

4 能登の七尾の冬は住うき

5 魚の骨しはぶる迄の老を見て

(雑。人情自)

兆  
蕉

(現代語訳) 歯も抜け落ち、魚の骨をしゃぶって生きて行かねばならぬ老人となった今、この能登の七尾の冬は住みにくいことだ。

(付心) 其人の付。この付心を「三冊子」には、「能登の七尾の冬は住みうき

魚の骨しはぶる迄の老を見て

前句の所に位を見込み、さもあるべきと思ひなして、人の体を付けたるなり」

と説明している。これは前句に詠まれた能登の七尾という場所のわびしい位を見定めて、こういうこともあろうかと推量して、前句の人の様子を付けたのであるという意味であらう。

(付味) 「三冊子」に位という外、逆志抄には「魚の骨は前句の七尾のしをり也。老を見ては冬は住うきというよりの響也」という、響の付け味と見る説がある。また、能勢朝次の「連句講義」には、前句全体を包む寒くあわれな気分、「冬は住うき」とかこつ語気から生まれる衰老の

感、そうした余韻の「にほひ」を以て、更に寒苦に悩む衰老の状を付けているというから、「にほひ付」と見ているのであろうか。この点、位の付であることは間違いないけれども、響付か「にほひ」付かの判別になると、各人各様の意見があり、私としては感情に激しさがあるので、響の方が適切であると思うが、いかがであらう。

(転じ) 打越の道心者から、在俗の老人への変化で、場面も気分も転じている。この転じに有効だったのが「魚の骨」である。さらに「しはぶる」(しゃぶる)の語が特に活きている。歯の抜け落ちた老人が、骨についた魚の肉をしゃぶっている様子が、貧寒の実態をまざまざと表現している。「古集弁」に「寒苦の人をさだむ。具さびあり」と言っているのも首肯される。

(補説) 「類船集」によれば、「能登」には、鯖、烏賊の黒漬などが付合語となっている。特に能登鯖は有名で、それで前句の「能登」から付句に魚が出て来るのであるが、その魚も夏から秋までは大変よく取れるが、冬は不漁の日が多い。それで「魚の骨しはぶる」というのが出て来るわけ、この句には老いて寒国に住んでいるという上に、貧しいものも加わっている。

解釈によっては、土着の漁夫が年老いたのを嘆く意にも取れないことはないが、土着の人なら「能登の七尾の」とは言うまいし、また言っても感慨が切ではない。故あって都を離れ、あるいは都を追われて、辺土に身をかくした人などの境涯であらうか。能登はもと流刑の地で、平時忠な

どもここに流され、その墓は珠洲にあり、曾々木には嫡子  
平時国の邸が残っている。

5 魚の骨しはぶる迄の老を見て

6 待人入し小御門の鑑

蕉 来

(雑。恋。人情自他半)

(現代語訳) 齒が抜けて魚も骨をしゃぶる有様になった  
老人から鑑をとり、通用門を明けて姫君の恋人を邸内にお  
入れ申したことであった。

(付心) 俛の付。このことについては、まず「去来抄」  
に「浪化曰く『今の俳諧に物語などを用ゆる事はいかが』  
去来曰く『おなじくは一卷に一・二句あらまほし。猿蓑  
の待人入れし小御門のかぎ、も門守の翁なり。この撰集の  
時、物語等の句少なしとて、粽ゆふとの句を作して入れ給  
へり』(註「粽結ふかた手にはさむ額髪」とあるが、浪化  
宛去来書簡(元禄七年五月)には、もすこし、くわしく書  
かれてゐる。「さるみの集」に源氏に下心をふくみたる句  
御ざ候よし被仰下候。成ほど御目きゝの通りに『隣をかり  
て』は夕かほ、『待人いれし』はひたちのみやと存じより  
て仕候……」

右によつて、この句が源氏物語末摘花の巻の記事「御車  
出づべき門は、まだあげざれば、鍵の預り尋ね出でたれ  
ば、翁のいとみじきぞ出で来たる。むすめにや、孫に  
や、はしたなる女の、衣は雪にあひて煤けまどひ、寒しと  
思へる気色ふかうて、……翁、門をえあげやらねば、寄

りてひき助くる、いとかたくななり。御供の人寄りてぞあ  
けつる」とあるのに依つてゐる。源氏では光君が帰ろうと  
された時の情景であるが、それを去来は光君みたいな貴公  
子の恋人が入つて来られるさまに作りかえて、一層賑わし  
くはなやかなものにした。伊藤正雄氏は「前句の老残の人  
をこの門守の翁として、艶麗な貴公子をこれに配し、美醜  
を鮮かに対照させた、いわゆる違付である」と言つておら  
れ、一種の向付として取つておられる。これも尤もである  
が、私は、この一句に待人と彼を入れる門番が居るので、  
いわゆる向付とは見難く、自他半とすべきであると思う。

(付味) 先にも指摘したが、「末摘花」の巻では、光君  
が姫の家を出る時の情景となつてゐるが、それを去来は、  
光君が来られた時の様子に作り変えてゐる。浪花宛去来書  
簡には、このことについて、「他流には物々さき(面倒  
だ)とて仕らざる人(俛付を使わぬ人)も御座候。しか  
し、それは書物のままにて己が物に仕ゑざるゆへに物ぐさ  
くなり候。言葉なども直に書物のまゝに句づくり候ゆへあ  
まく成行候。故事にても我物にいたし仕らんに別状あるま  
じき事に奉存候」と述べてゐる、要するに古典そのままを  
取り入れるのではなくて、自分のものにして付けねばなら  
ぬと教へてゐるのである。俛付とは全くそうあるべきもの  
で、「逆志抄」が「出るを入ると転じたる手づまにて俳諧  
になる也」と言つてゐるのは至言である。手づまとは手  
品、マジックである。

(転じ) 裏に入つて第一句目から、「蛙こはがる夕まぐ

れ」と昏く、その次が「行燈ゆりけす」でまた昏く、さらに折角の花も「道心のおこりは花のつぼむ時」と釈教や観想と結びつき、それからは僻地の冬のきびしき、魚の骨をしゃぶって衰老の身を養う人と、暗い陰惨なイメージの句が続きすぎた。そして、ここで漸く恋の句、それも待ちかねた貴公子が入って来られ、眩いばかりの明るさに一転できたのである。また、打越前句の僻地の貧寒なさまから、小御門という語により高い位に一挙に転じ得ている。

(補説) 太田水穂は「老を見ての『見て』は、前句では老人の身に重ねて来た老であるが、この句へ来ると待人がさう云ふ老人を眺めながら門を這入って行くので、この句の出で来る動機も実は前句の見てといふところに心を入れて、そのきつかけから待人入りしと出して来たもののように思はれる。それほどこの『見て』は当句からは大切な字眼になって……」と述べているが、大事な姫の愛人に、魚の骨をしゃぶっている所を見られたのでは、切角の恋がさめよう。あまりにも拘泥した考えとして賛成できない。

6 待人<sup>いれ</sup>入<sup>れ</sup>し小御門の鑑<sup>かき</sup>  
7 立<sup>た</sup>か<sup>り</sup>屏風を倒す女子共

(雑。恋。人情他)

(現代語訳) 通用門をあけて来られた姫君の恋人の姿を一目見ようと、末の女たちは大騒ぎで屏風によりかかり、とうとう押し倒してしまった。

(付心) 前句の門番とその門を通過して入って来られた男

兆 来

性に対し、それを覗見しようと脅きあう女たち、これは向付である。古い註釈書(たとえば大鏡など)には、この句までも常陸宮の邸内のこととし、源氏物語の倂とし、確かに末摘花の巻にも「乳母だつ老人などは曹司に入り臥して、夕まだひしたる程なり。若き人二三人あるは、世にめでられ給ふ御ありさまを、ゆかしきものに思ひきこえて、心げさうしあへり」(光源氏を意識し、改った気持になっていた)とあるけれども、このようなことはあとで述べるように、どこにでもありがちなことであり、同じ場所の倂が三句続くということも不都合である。源氏物語の世界に限定し、末摘花邸の倂と見る必要はない。

(付味) 軽くユーモアたっぷりに捌いているが、前句の待人が来たよるこび、賑かきの浮き浮きした気分が通っている。これは響の付と見てよいだろう。

(転じ) 打越の句の凄惨ともいふべき老の姿に対し、これは若い女性の賑かさにあふれ明朗・諧謔の気分が溢れ、まず、この暗さから明るさへ大きな転換が見られる。さらに前句は全くの貴族的情景であったのに対し、これは、やや庶民的となりつつも、まだどこやらに一脈の品格を保っており、打越の貧寒な生活からは全く転じている。

(補註) この一句だけでは恋の句にはならないけれども、前句につけてみれば、はっきり恋の句である。

また、屏風は現在では冬(三冬)の季語であるが、近世期ではまだ季語に入っていない。さらに、屏風をめぐる滑稽な話は、「枕草子」第三段・「狭衣物語」巻一「今姫君訪

問のくだり、さらには十返舎一九の「東海道中膝栗毛」赤坂の宿で、新枕の隣室に泊った弥次・喜多が夢中になつてのぞきこみ、境のふすまを押し倒す話などに残っている。

打越と前句は完全に源氏物語の世界であつたが、三句にわたつて同場所では困るので、ここは離れた方がよい。しかし、あまり落しすぎて、民家や旅宿の景とすると「小御門」の位に合わない。それでやや庶民的になりつつも、まだ、ある程度の品格が必要であつた。この句は原形は「屏風をこかすをなご共」であつたのを「屏風を倒す」と改めたのも、この配慮によるものであろう。

7 立かゝり屏風を倒す女子共

8 湯殿は竹の簀子佗しき

(雑。人情なし)

(現代語訳) 家の表では婚礼を見ようと、下女や手伝いの女どもが立ちかかり、とうとう屏風を押し倒すような賑かさだが、その家の裏の湯殿はひっそりとして、竹の簀子がわびしげである。

(付心) 其場の付。

(付味) 前々の浮き浮きした気分と、付句のものの寂びしい気分とは、全く反対であるが、女子共と湯殿、屏風と竹の簀子の位が、完璧であるために、相反した世界が一つに統合され、独自の世界を作り出している。

深川の夜(阿羅野)

雲雀さへづるころの肌ぬぎ

越人

破れ戸の釘うち付る春の末

見せはさびしき麦のひきわり

この一連に似たところがある。

芭蕉 全

(転じ) 打越に小御門があり、この付句に湯殿があり、居所の打越ではないかという論が昔からある。これにはいろいろ説明があるが「居所三句続けて、中の句屏風と出たれば居所子細なし」(逆志抄)という説明が一番合理的で納得がゆく、即ち、居所は三句去りだが、また三句続けることも出来るのである。中の句を居所と見れば、三句続きの居所であるから、去嫌の難はのがれる。

(補説) 前句と付句、この一連の解釈はまちまちである。①田舎の旅宿―本陣などで客が去つたあとのさまとするもの。②片田舎の旅宿のさま、③田舎の旧家の婚礼の場、④宮仕えした女の宿下りのさま、⑤この句までも源氏の佛とする。以上のうち、⑤は源氏の佛を三句にわたつて取ることは連歌の時代からの禁制であるから別として、①から④まで、それぞれの理由が存する。しかし、ざわめく家内とひっそりした湯殿の淋しさ。華やかな状景を通して哀愁の気を出すところに、芭蕉の得意な手腕が認められるとすれば、③などが最もそれに叶っているのではないかと思つたのである。「小傘」には旅宿―湯殿という付合があるが、客が去つた後、女中がばたばた後片づけをして屏風を倒してしまつたなどと解するのは、芭蕉の付句の真意を解せぬものといふべきであらう。





ナ  
潑刺と紺の制服新社員

N T T株買へぬ口惜しさ

ワープロを老眼鏡をかけて打ち

かがし揚げして遊ぶ子供ら

新婚のはじめて作るのっぺ汁

雨戸をしめて宿直のあけ

浄瑠璃のさはりのくぜつ哀切に

香車が成って王手飛車取

夢の中髻を剃ったる幼な顔

ドナルドキーン源氏説きをり

見はるかす須磨も明石も月ならん

秋の遍路となりたどる道

ナ  
山際の空を渡れる雁の列

話の絶え間渋茶さし出す

逝きし友偲びて織りし綾錦

穀雨のけふの静かなりけり

花びらのひとつ離れて水の上

親も揃ってぶらんこを漕ぐ

昭和六十二年三月二十一日 首尾

於 俳句文学館

司 夫 雅 司 彦 夫 雅 司 彦 夫 雅 司 彦 夫 雅 彦 司 雅

ときは木枯しが吹いておりましたが、今回は春雨が降っておりました。

## 香歩さんのこと

草間時彦

鈴木香歩さんが亡くなった。急逝だった。その報を受けたとき、人というものは、私自身を含めて、いつ、どういうことで死ぬか判らないものだ、としみじみ思った。

鈴木さんの笑い顔は、まことにいいものだった。たちまちに親近感を覚えるというような笑い顔だった。ああいう笑い顔をする人は、心も美しいし、人間としての厚みもある人なのだろうと、いつも感じていた。

この人のネクタイをしめた背広姿を見たことがない。いつも、ラフで気楽な格好をしていらつしやった。それがよく似合った。ただ、鈴木さんは、学長としての公式の場では、どんな服を着ていられたのであろう。私はふと、そう思ったことがある。

いい人だった。敬愛出来る人だった。私は連句の友の一人を失ったという思い以上に、大切な友人を失ったという悲しみが濃いのである。

その笑顔遺して年の暮れにけり  
私の悼句である。 時彦

# 亀戸天神藤祭り奉納正式俳諧興行

## 第二十一回 猫蓑会

第二十一回猫蓑会は四月二十五日(土)、江東区亀戸天神社社務所で、同天神藤祭りの一環として、正式俳諧を興行、奉納し、そのあと、二十韻七巻を首尾した。

第一部 正式俳諧興行 「溼東や」一卷  
 第二部 二十韻興行 「藤の房」他六巻

### (一) 役割

宗匠 東 明雅  
 脇宗匠 杉江 杉亭  
 執筆 中川 杉哲  
 知司 杉内 徒司  
 副知司 秋元 正江  
 副知司 中島 啓世  
 座見 山口 みづゑ  
 座配 山下 清子  
 花司 式田 和子  
 配硯 原田 千町

### (二) 次第

- 一、席入り (知司の指図により座見・座配の役)
- 二、配硯 (重ね硯を配る)
- 三、献花 (花司)
- 四、執筆呼び出し (宗匠)
- 五、文台捌 (執筆)
- 六、俳諧興行 (知司、挨拶のあと連衆付句)
- 七、花前 (執筆)
- 八、玉串奉献 (宗匠)
- 九、花の句披露 (宗匠)
- 一〇、端作り (執筆)
- 一一、吟声 (執筆)
- 一二、文台返し (執筆)
- 一三、作品奉納 (執筆)
- 一四、挨拶 (知司)

二十韻 溼 東 や

溼東や鎮めの宮の藤祭り  
 鯉悠々とうららかな池  
 凧作る多くの仲間集りて  
 咽喉うるほす紅茶一杯  
 湯上りの肌を照らして月涼し  
 擦りよるものは蛇の化身か  
 オフィスでは評判のよきタイピスト  
 溼の彼方に白き灯台  
 大島の山の噴火も時に見え  
 ジョギングにまで躓いてくる犬  
 獵人の獲物も年々減るばかり  
 杜氏迎へてきりたんぽなど  
 北国の女の情にほだされて  
 踊浴衣の派手な染柄  
 満月の空にうすうす雲遊ぶ  
 幼児の籠逃ぐるさちさち  
 道端の屋台に何の人だかり  
 放送局のビデオ車が着き  
 新しき文臺花に使ひ初め  
 霞の中に望む名所

武 司  
 正 江  
 篤 子  
 正 雄  
 麻 子  
 貞 子  
 孝 子  
 天留子  
 徒 司  
 久美子  
 啓 世  
 あかり  
 東 夷  
 彬 風  
 み き  
 淳 子  
 隆 遊  
 明 秀  
 執 筆

拜啓、陽春の候愈々ご健勝のこととお慶び申しあげます。

さて、先日は正式俳諧をご奉納賜わり、厚く御礼申しあげます。本日は懐紙をお送りください、重ねて御礼申しあげます。

早速乍ら、御神前に献供いたしました。さぞかし天祥様もご嘉納のことと存じます。

正式の俳諧は初めてのことでしたので関心深く、興味を抱いて参席させていただきました。

執筆の作法は、茶の道のお点前を思わせ、格式高い諸作法に、四季の折々に、連歌会が興行された当宮の連歌会もかくあったものと、遠く江戸の頃を想い起しておりました。貴重な体験をお与えくださいまして、誠にありがとうございます。深く感謝いたしております。

連衆の皆様方へも宜しくご鳳声ください。日々ご多忙のことと存じますが、折につけ時にふれて、どうぞお気軽にお立寄りくださいますれば幸いです。

陽春とは申せ天候不順の折柄くれぐれもご自愛くださいますようご祈念申しあげます。

敬 具

四月廿九日

東 明 雅 様

木 村 恒 雄

藤の房 東 明雅 捌 藤の風 内田麻子 捌 うららか 中田あかり 捌

岸よする波ゆるやかに藤の房

巢立ちの鳥の遊ぶ大屋根

浅蜷汁膳の用意も整ひて

覚えきれない化学反応

短夜のあけゆく空に白き月

きぬぎぬの汗流す水風呂

ねえあなたどこで浮気をしてゐるの

両国太鼓胸に打ちこむ

入院の子のスリッパのちびて来て

テレビ相手にひとり呑む酒

炉に掛る自在の鯉の黒光り

猪射とめたるハンターの夢

ねむり姫睫毛に小さき露うかべ

待ち人たのむ十六夜の月

かまつかは変る紅恋の色

贖札捨ててごみの川原に

コマ劇場ジン・ケリーの雨の唄

サイフォンたぎり薫る珈琲

風化せる道祖神見え花吹雪

腰をかがめて畦を塗るなり

耕子

明雅

治子

竹代

都美子

幸子

泉

耕

代

治

同

耕

代

武司

幸

代

泉

代

都

泉

御社に句を奉る藤の風

笛流れ行く昼の長閑けさ

農具市ふるさと訛りまじり居て

犬と一緒にごきげんの孫

満月に向ひて浜辺走るひと

秋真白な貝の耳たぶ

冷まじくからみては解けエル・タンゴ

日米交渉ごたごたのまま

明石町明治に建ちし西洋館

サンダル履きで散歩ふらりと

アイスクリームトリプルにして中学生

あの娘とこの娘どちらにしよう

恋敵殺人光線噴射して

琥珀の酒に泛かぶ凍月

ゆるやかに豪華客船岸離れ

語れば哀れ虚子も久女も

だんだんにむずかしくなる余生あり

いちかばちかで買ひし株券

助六の魚葉牡丹に花の雨

色うつすらと木の芽田楽

麻子

孝子

哲

澄子

久美子

孝

同

哲

同

久

麻

久

澄

孝

澄

孝

麻

孝

哲

久

うららかや父と渡れる太鼓橋

水鏡する藤の紫

巢構への雀が藁をくはへきて

五言絶句をひとり推敲

美人女優大正村の村長に

マフラーかけて抱き合ひし月

かじけ猫何でも知ってゐる顔で

札所巡りて呆け除けの願

江戸小紋渋紙に剪る極の技

フランス菓子はおもたせでお茶

せせらぎに竹の皮落つ音ばかり

目の足らざるも前衛の絵よ

鬼となりにつくき彼の肝嚙まむ

惚れちまつたらやるっきゃないさ

月とジャズグラスの酒も揺れ揺れる

異国の丘で聴きし虫の音

過去はみな砂に埋めんそぞろ寒

師弟手を振るパスの内

花守は峽の棚田を打ちてをり

蜷汁吸ふ黒塗の椀

あかり

千町

清子

隆秀

徒司

よしえ

清

同

町

同

同

清

司

秀

町

え

司

町

清

同

藤波

馬場彬風 捌

棚の藤

雑賀 遊 捌

藤の色

吉澤てるよ

捌

藤波を揺るそよ風や太鼓橋

雅楽のどかに開く文台

春袷刺繡の襟のほのかにて

隣部屋より匂ふ珈琲

弦月の白く残れる山の端に

雁ながむ頂かぼそぎ

わが思ひ蒲の穂絮に言伝む

ためらひつつも押せる爪印

サミットのあと引退と囁かれ

文珠の智慧と黙す半眼

焼酎の酔ひか足許おほつかな

つるりとぬけし鰻いづこそ

不惑まで税あがらぬままに過ぎ

ロッキー山脈手を取りて越ゆ

月芽えてたまゆら淋し人恋ひし

ぼそぼそと囁む勅題の菓子

初詣孫ひこやしやご末広に

回転木馬廻り廻りつ

西行の桜一気の花盛り

暇かすみて憩ふ黄昏

彬風

みづゑ

貞子

雅代

風

代

ゑ

子

ゑ

風

子

代

ゑ

子

代

ゑ

風

子

代

利

子

棚の藤どこからとなく揺れはじめ

日うらうらの下町の路地

灰かぶせ春の火桶をまだ置きて

足にまつはる白きブードル

夕月に綴ゆるびたる謡本

宿の小窓に色のなき風

そぞろ寒厄年の恋と知りつつも

熱き乳房に顔を埋めぬ

いつまでも子供でゐたいガキばかり

駅前広場選挙車の群

出まかせの言葉つくらふ柏餅

ホイホイを置きゾロゾロを置く

シャドー濃きあの娘シロトかクロウトか遊

通夜の喪服のなまめきて見え

片時雨過ぎし雲間に鎌の月

餌台を翔つ鶯二、三羽

新しい橋を渡りて「鳴門鯛」

出産祝西に東に

花ふぶく天神様は賑ひて

池の汀にもゆる陽炎

遊

東夷

香

元子

子

元子

夷

元

香

夷

み

同

夷

遊

香

元

み

夷

み

香

元

藤の色池明りして濃かりけり

耳を澄ませば亀の鳴く声

家苞に草餅の折贈ひて

待針さして姉と休憩

山近く眠る夏蚕へ月まどか

金魚すくひを囲む子供等

しあはせな夫婦にひそむ謀反心

酔へば女がみんな美人に

ほつれたる髪かき上げて煙草吸ふ

ガンジス河は聖なる河

4WD若者駆けるオフロード

お札受けても母は心配

粉雪を払ひ陶器の傘立てに

目と目瞳める冬帽の中

開病の日記ひえびえ恋の章

秋団扇して老はつれなく

月蒼し寺紋の見ゆる鬼瓦

寝ころんでゐる子犬親犬

高遠のこひが桜花ふぶき

ぬぎ捨てし服たたむ春愁

てるよ

郁子

杉亭

正江

天留子

淑子

江

郁

淑

江

淑

天

亭

淑

江

よ

郁

江

亭

天



# 亀戸天神藤祭り

## 奉納正式俳諧興行

### 式田 和子

昭和六十二年四月二十五日、明雅師門下猫藪会連衆は、亀戸天神藤祭りに正式俳諧を奉納した。式次第は次の通りである。

十二時三十分、正式参拝。明雅師玉串奉典。奉納興行の緊張が漲る。

一時、知司杉内徒司、興行開始を告げる。

(一) 席入り。座配下鉢清子先導して、宗匠

明雅師、脇宗匠杉江杉亭、貴賓、久保

田月鈴子先生、大鳥居武司宮司、木村

恒雄弥宜、石寒太先生、加藤耕子先生

着席。あと連衆一同着席。

(二) 配硯。重ね硯を原田千町配る。

(三) 献花。副知司中島啓世、宗匠の前に進

み準備の整った旨をのべ、宗匠の「献

花」の声で花司式田和子、花(当日は

牡丹)を活け、神前に供える。

(四) 執筆呼出し。宗匠「執筆、執筆」と呼び、執筆中川哲文台を持って立つ。神

前に着座。

(四) 文台捌。執筆文台捌きを終え、歌膝に  
なつて待つ。

(六) 知司挨拶。知司下俳諧十五句まででき  
ている旨を告げ、連衆に付句を促す。

(七) 俳諧興行。連衆は付句を小短冊に書き  
「付け」といって示し文台の前に進み

一礼して示す。執筆は去り嫌いを調べ  
宗匠に見せ、よしとあれば「句有り」と

読み懐紙に認め小短冊を返す。句主は  
座に戻り執筆は重ねてその句を読む。

(八) 玉串奉献。句の花の前句が付いたら執  
筆は「花前」と呼ぶ。副知司秋元正江

進み出て、宗匠に花の句を乞う。花の  
句主が定ったら執筆は前句を詠む。田

中神官玉串を持って出、宗匠に渡し宗  
匠は神前に供え拜礼。

(九) 花の句披露。宗匠の花の句を執筆は脇  
宗匠に捌きを乞い「句有り」といって

吟声して書く。挙句は執筆。

(十) 吟声。文台返し。奉納。執筆は当日の  
一卷を披露し、作法通り文台を返し作

品を奉納、配硯が重ね硯を集め、興行  
は終了する。

この間約一時間。このあと、第二十一回

猫藪会が貴賓、来会者を交え七席、賑かに  
興行された。宗匠の花の句は、

新しき文臺花に使ひ初め 明雅

この新しい文台は、五十嵐讓介氏作、銘  
は「左沢」。二見ヶ浦を画かれた格調高いも  
ので、絵は名和浩画伯である。

歌麿江戸名所十景の内、亀戸天神の錦絵

にある太鼓橋を渡ると社殿。その右に昨年  
能楽堂が新築された。明雅師はお祝詞のう

ちに、昔から連歌の奉納もあつたことを書  
かれたのがご縁で、今度の正式俳諧の奉納

が定つてから、連衆一同は好天、好声、好  
歩、好礼、好句と数限りなく天神様に祈る

ような気持で過したが、幸い当日は藤は満  
開に匂い立ち、天気は上々、参拝客はひきも

きらず、興行は立見の振りのお客もあり、  
名古屋、豊田からの参会者も加えて八十余

名の大盛会となつた。凜とした宗匠、歌膝  
立てた執筆の上々吉の吟声が響き格調高く

厳肅ながら、女性も交つた興行のため、藤  
の花のようにほのかに艶の漂つたのは藤祭

りにふさわしかったのではなからうか。

終りに、亀戸神社の数々のご好意に厚  
く御礼申上げる次第である。

# 絶頂の城

付勝練習歌仙

東 明 雅

切 締 句 投  
日 20 月 7

ウ9 叱られて上目づかひに拗ねる犬

ウ10 ボール逃げたる野辺の陽炎

十七句目

治定 相方と合はず鳴物花見幕

1 花の寺納所先立て御練来る

2 散る花にねむる浮浪者仏めく

3 舞ひ姿艶をきはめて花と老い

4 民謡のお国訛りの花の宴

5 花筵一枚借りて一家中

6 肩車せし親子連れ花の中

7 本堂も鐘撞堂も花の雲

8 尼もゐる女ばかりの花筵

9 ヘルメット脱ぎて少年花の径

10 うすずみのはなのいのちのたたずまひ

11 東の塔花は万朶のひかりなり

12 入学の帽に花片のせ帰る

13 厨子暗く法華寺つつむ花の冷え

14 巡礼の列たゆるなし花の昼

孝子 井田淳

和子

遊

あかり

竹代

妙子

智子

杉亭

正雄

治子

良子

隆秀

篤子

井田淳

天留子

力

※前に出ているので、そこがやや難である。6はほほえましい句だがやや平凡、7は前句の陽炎に花の雲はいかがであらうか。これももちろん釈教の句だがその釈教が真に生かされていないのではないか。その点、8は同じ釈教だがおもしろい。9は表の六句目に「新聞少年」がいるから、しかも一方は「寒の道」、これは「花の径」で同じく歩行態である。こういうのを遠輪廻というのである。10は丈高い句だが、それだけに前句の気分から離れ、転じもあまり利いていないようだ。11も7とやや似た感じ。12これは軽くもおもしろい。しかし、入学と花片が季重りで、しかも入学は中春であるのがまずい。13は付味もよくないし、転じも利いていない。前句でせつかく明るい気分が出たのだから、また暗い気分を引き戻すのは困る。14は同じ釈教の巡礼だが、賑かそうだし、花の昼だから明るくなっている。15は綺麗な句である。だが「花のちらちらと」が「野辺の陽炎」がちらちらする印象とダブっているような気がする。16初花は中春の季語である。尤も陽炎が三春であるから、中春を付けても季戻りにはならないし、病態を出しながら「嬉し」とか「試歩」とかの語で、句全体が明るくなっている。お葉書によればこのお姑さんは九十歳で無事御退院の由、およろこびの気持は分かるが、ここで「姑」と限定しなければならぬかどうかが問題である。17は平泉毛越寺とのことだが、花一片ではやはり淋しい。18これはよい所を狙ってよろしいのだが、「花の幹」では何となくどっしりしすぎて前句の明るさに余情が通わない。そこを



- 15 雛僧の衣へ花のちらちらと  
 16 初花の径も嬉しく試歩の姑  
 17 平安の遺水の跡花一片  
 18 はねつるべ長者の家の花の幹  
 19 花の宴歩き初めたる兒も連れて  
 20 花吹雪キラキラ廻る観覧車  
 21 リハビリの患者にやさし花映り  
 22 石刻む音絶え間なく花吹雪  
 23 遠山は霞みて花の真盛り
- 千町 元子 哲 澄子 麻子 慶子 よしえ 美幸

1は釈教の句である。この巻そう言えば、釈教・述懐・病態・山類・旅の句などが未だ出ていなかった。それを見破って釈教の句を付けた人が、この句の外に八名も居られたというのは、それだけ作品の全体が見通せるようになったことを意味し、連衆の進歩のあとと見てよいだろう。ただし、1は前句の付味がいかがか、決して付味が悪いというわけではなく一応付いてはいるし、前句のスポーツと対付みたくておもしろいのだが、打越がやや屈折した感情の句だけに、それから転ずる意で釈教の句より、野放図に明かるい花見幕の句を治定することになった。花見幕は自他半の句である。その点2も釈教めいた感じがあり、「拗ねる犬」と「仏めく浮浪者」は気分の上で何か通うものがあるろう。3は「老い」が気にかかる。これは述懐の意が感じられないか。4は治定の句と全く同一の景だが、表現の上で及ばない。5もおもしろかったが一枚・一家の数字が※

何とか考えて貰いたい。19これは初孫をつれて花見に行くよるこびが満ちあふれている。それだけに明るさも十分な句である。20は一句としては美事な句である。キラキラと陽をうけて廻る観覧車に花吹雪の美しさ。だが、これは花吹雪の美しさと、陽をうけて廻る観覧車を衝き合わせた二章体の句のように考えられる。平句で二章体は絶対にいけないとは言わなければ、あまりはつきりそれが出る、まるで俳句を連句の中に投げ込んだようで、この点注意して欲しいと思うのである。21も病態の句だが、これは病態と言っても、「やさし」と「花映り」が利いて暗い印象は与えない。ただ、「花映り」という言葉は造語であろうが、この点「花明り」という普通用いられている言葉では換えられないのであろうか。22は、花吹雪の句であるが、これは野外で石を刻んでいる健康的な雰囲気を感じられて、前句にもよく付き、打越の気分からも美事に転じている。23この句も気分はよく分かり、前句への付心、打越からの転じ十分であるが、如何せん、すりつけとは言え、遠山と野辺はべた付であり、霞と花が季重りで残念であった。

治定の句を再び賞讃するにも及ばぬところだろうが、この句の俳味、それは「相方」とか「鳴物」とかの俗な言葉把えて、花見幕という優美なところに結びつけたところであり、連句のおもしろさは結局こんな所にあるのである。人情自他半の句で、晩春の句だから、次はやはり人情（自他ともによろし）で晩春の季語で付けて欲しい。



電柱盾に避ける砂利トラ  
あちこちの轍に溜まる花吹雪  
絵風字風にめんこけん玉

虫時雨笛一卷の音取りして  
月下の門を尼の訪ふ

衣被つるりとのを通り過ぐ  
社長含みで天下りたり

瀬戸小島郵便船の二往復  
かつら脱ぎ捨て左袂の妓

うちかけに狂りし身を庇ひつつ  
鳥も賛美歌犬も賛美歌

はまなすの赤い実繋ぎ首飾り  
少年院に送る半生

ゲラ刷りの下駄の多きが生業に  
新刊も山返本も山

様々の安定剤を飲んでみる  
ハンカチーフに包む軽石

どてら着て気を入れてゐる大漢  
ラッコもどきの口許の髭

幾星霜興亡総て夢の夢  
幕上がりたる新派百年

ボストンで北斎版木見出され  
白魚すくふ箸のゆるやか

辰の刻まばゆき花の如意輪堂  
飛行船浮く空のうららか

昭和六十二年二月一日 首尾  
関口芭蕉庵

徒司 紗町

酔ひ忘れしやお土産の独活  
忽然と天上の声雲雀鳴く  
株の騰落一喜一憂

恵町 晴

てきばきとして蚕盛りの婆  
春障子糸のすべりもよくなりぬ  
王の趣味なり趣味の王なり

江 晴

江町 江 晴 江 晴 江 晴 江 恵 同 江 町 江 町 江

百韻捌記

徒司

いつものように一時六分開始、七時五分首尾。思ったより時間を要したのは、当日思いがけず芦丈翁のお孫さん二人が参加され、ひとしきり、芦丈回想談に花が咲いたからでもある。

当席には「二句置乱吟」と条件をつけたが、これは三の折に入って乱れた。連衆の作句力が昂まり抑えられなかった。

終って連衆の感想を聞いてみると、初めての百韻で興奮したという。

連衆の伎倆はとうに百韻をこなせるに到っていると思っていた私は格別の感慨もなかった。百韻を経験すると歌仙がらくになつて、当日落し物をした事に気付いた。私も相当あがっていたわけだ。

著 雅 明 東

夏	の	日	角川書店 (絶版)	700円
連	句	入	中公新書	価 540円
芭	蕉	の	岩波新書	価 320円
猫		恋	永田書房	価 2300円
連	句	辞	典 (杉内徒司・大畑健治共著)	
				東京堂出版 価 3500円

花野連句会 二十韻 下萌

下萌や山鳩鳴いて朝となる

垣根結びに垣を繕ひ

おひおひに訪問客の数増えて

ラジオのニュース台風のこと

木の枝をすり抜け月は天心へ

牛蒡ばかりの牛井を食べ

束の間も手と手を握りしめもして

とるものれば「ハイサヨウナラ」

逆波に水上スキー投げ出され

映る景色はビー玉の中

馬券買ひ神の御前にひざまづく

宵に見し夢正夢となれ

消防車火事は上野か浅草か

冬の月あり禁煙パイポ

ポニーテールはらりとほどく白い指

黒のマニキュア偽りの口紅

大空に飛行機雲の行くを見る

砂丘風紋日々に変りて

人の世のさまざま花は散りぬるを

かげろふ燃えて遠き口笛

昭和六十二年三月二十二日

於 小出きよみ居

水城 澄

小出きよみ

布山 翠

小出まこと

木村よしみ

川口 栄子

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

小出きよみ 捌

七十七回ともなれば、芦丈翁の名言「根を切れ」もよう

やく身について来た感じである。

映る景色はビー玉の中

馬券買ひ神の御前にひざまづく

ここの付合、ようやく此処まで来た、と捌き大いに喜ぶ

のところであった。こんな調子で進みたい。

ウラ折立

木の枝をすり抜け月は天心へ

牛蒡ばかりの牛井を食べ

右の付にも言える。こんな感覚をどうか大切に一人一人

が育てて欲しいと心から思う。

ナオ3句目

消防車火事は上野か浅草か

冬の日あり禁煙パイポ

ポニーテールはらりとほどく白い指

黒のマニキュア偽りの口紅

大空に飛行機雲の行くを見る

「火事は上野か……」の遊びどころが嬉しい。「禁煙パイポ」は商品名でどうかかと、危惧もいささかありはしたが、付味のおとほけと恋の呼び出しの働きの手柄の方をと

ることにした。或るTVの番組で、男性が、女性のしぐさを

で最も気になり心惹かれるのは、髪をかき上げる動作だ、

まこと

栄子

絹子

澄

翠

というアンケートの結果が出た、とか言っていた。すると「ポニーテールはらりとほどく……」などはその最たるものかも知れない。前句との付けのかねあ、もきまっっている。「白い指」「黒のマニキュア」「口紅」と豪華で激しい色彩の配合が、ウラのうぶうぶしい「牛井」喰べて手を握りしめる恋と対比して面白いな、と思った。色の重りはすり付として許されたい。すかっと恋離れの「大空に飛行機雲の……」も鮮やかであった。

まだ、打越（かんのん開き）去り嫌ひにさわる出句の頻度が多いのが、これからの花野連句会の宿題だと思ふ。しかし、「連句をたのしむ」「連句は面白い」「連句で遊ぶ」こう言った雰囲気がこの会に定着して来たのはまことにめでたいことと思っている。「連句はたのしく、面白い」が出発点ではなからうか。これからが始りで、ややこしい式目も約束ごと何もかもそうしているうちに取り込める。思わず知らず身につく、そんな風になっていくだろう、き

つとそうなる。その上、一卷に馥郁たる香氣が添うようになれたら、などと夢みる私である。

二十韻については、現代の心忙しい生活に即した、まことにかたかたを生み出して頂いたと、東明雅先生にあらためて敬意をささげたい。両吟または三吟で「あずさ」で新宿まで、「しなの」で名古屋までの車中のなんと愉しいことよ。残り少なな此の世の時間を少しでも多くたのしき面白さを貪りたい。

まだ現役での仕事あり、俳誌の編集あり、初心者指導の各地の句会ありで、かなりハードな時間帯の中で、現在一っだけ進行している文音、この付に没頭する小さな時間が珠のように私には嬉しく大切である。忙しければ忙しい程、このひとときが愛しい。連句を学ばせて頂いてほんとうにありがたいことであった。

## 武翁賞作品募集

作品は歌仙または二十韻だが、そのやり方は自由、  
九月十日（木）までに呈出されたい。

応募作品は「武翁賞応募」と朱書すること。

柏連句会

二十韻 藤の房

井手樗晴 捌

二十韻 木の芽風

東 郁子

捌

藤の房まだいとけなき窓明り

硯の海に揺らぐ陽炎

春田打ち人に鶉のしたがひて

時をたがへず届くことづけ

双発に給油満タン月凍る

同行二人雪をんなわれ

毒薬のごとき恋して何とやら

売上税は平に御容赦

天削ぎし竹の割箸香港で

カレーライスの激辛が好き

<sup>ナオ</sup> 過疎村に芸術集団裸なり

暴れ御輿がおおる垂れ幕

年上の義理の弟酔はせつつ

闇ねだりして傾きし国

風抜ける大手首塚群れ蜻蛉

お六櫛置く店の宵月

<sup>ナウ</sup> 泊夫藍で染めるフアツシヨン裾長く

犬を抱えて南青山

立ち話とぎれどぎれに花の径

遅日の川面すべりくる鐘

昭和六十二年四月十九日

於 柏市光が丘近隣センター

開け放つ句座やはらかや木の芽風

春の障子に弾む兎の声

蛤の高き香の立つ吸物に

夕餉の膳に待ちかぬる酒

小さき旅祭の村の月明し

若さ凜々しく白緋着て

襟足にシャネル句はせ誘ふ魍魎

大川端に捨てられし猫

贗札と知って使ひし夢を見る

袈裟をふるって探るふところ

<sup>ナオ</sup> 寒風に超高層ビル肩張りて

くちばし凍る御手洗の鶴

涙拭く妊りしこと告げられず

エイズ怖し夫怖し

二人来てロサンゼルスに仰ぐ月

ハンバーガーをかじる新涼

<sup>ナウ</sup> 蜻蛉の高さ違へて電線に

遙か彼方に故里の山

どこまでも歩いてみたき花の径

ぶらんこ揺する兄と弟

昭和六十二年四月十九日

於 柏市光が丘近隣センター

郁子

楓風

佳都子

明雅

冬乃

雅乃

乃風

同風

佳乃

乃佳

佳乃

郁佳

佳乃

雅乃

乃佳

佳乃

乃風

風乃

乃風

乃風

## 連句会案内

### ●連句教室

日 時 第一日曜日 午後一時—五時  
場 関口芭蕉庵

文京区関口二ノ一ノ三  
(電) 九四一—二四五

### ●柏連句会

日 時 第三日曜日 午後一時—五時  
場 光ヶ丘近隣センター

(南柏駅よりバス 光ヶ丘団地マ  
ーケット下車)

日 時 A・C・C 連句・理論と実作  
午後二—四水曜

日 時 午後一時—三時  
場 新宿住友ビル四十八階

朝日カルチャーセンター

(電) 三四四—一九四一(代表)  
●猫蓑会(会員制)年四回

(一月・四月・七月・十月 第三水曜日)  
場 松声閣

文京区新江戸川公園内  
(電) 九四一—九六四九

## 雁帛往来

▽四月二十五日の猫蓑会は、亀戸天神社社務所で興行。正式俳諧一巻を興行して天神様に奉納、そのあと七席に分れて二十韻を興行した。初めての公開興行のため、参観者も多く緊張したが、好天に恵まれ、折からの藤祭りの藤も満開で恙なく終了でき、御同慶の至りである。この行事にあたって、いろいろ御配慮をいただいた宮司大鳥居武司氏及び禰宜木村恒雄氏ほか天神社関係の方々に厚くお礼を申すとともに、幹事以下、御苦勞をおかけした猫蓑会会員各位に厚く感謝する。

▼因みに、この時使用した文台は、信州大寺時代の教え子で、今は木更津高専の教授をしている五十嵐譲介氏に依頼したものである(本文二十頁参照)。女人はだしの素晴らしい出来であり、これに芭蕉の文台に倣って二見浦の景を柏市豊住在任の名和浩画伯にお願して染筆していただいた。私も大変気に入ったので、五十嵐氏の出身地、山形県左沢の名に因んで「左沢の文台」と名を付け、愛蔵している。

▼柏連句会には下鉢清子さんその他の方のお骨折りで、会員が三十名を越える盛況となった。毎月第三日曜午後一時—五時、南柏の光が丘近隣センターで、もっぱら二十韻の製作にあたっている。

▼A・C・Cでは、恒例により、次の方々に蕉風伊勢派伝道書が贈られた。

副島久美子・中田あかり・上月淳子  
原田千町・中川哲の五氏である。

▽昨年七月上梓された「連句辞典」は売り切れて再版が発売されている。我々の知らない処で連句人口がふえていると思うとうれしい。

### 季刊「連句」第十七号

定価 五百円

誌代 年二千円(送共)

発行 昭和六十二年六月一日

編集人 杉内徒司

発行人 東明雅

季刊「連句」発行所

〒277 柏市つくしが丘二ノ二ノ一二

電話 ○四七(七五)一一九二

振替口座 東京七—五二—一三三

印刷所 神谷印刷株式会社

東京都豊島区高田一ノ六ノ二四

電話 ○三(九八)一七一—一五

# 連句辞典

東明雅・杉内徒司・大畑健治編

連句の実作・鑑賞・研究に

必須の知識をすべて網羅!

初心者から研究者まで使える

本邦初の連句辞典

版

B6判  
三五二頁  
三五〇〇円

本書は、用語篇、人名篇から成る。用語篇は、現在使われている用語を中心に三二四語を選び、意味・用法の解説をし、「参考」欄の引用文は中・近世の諸資料から、用語がどのように記されているかを抄録。人名篇は、近代以降に活用した連句人、俳人五十四人を選び、項目末尾に代表的な連句作品を収録した。また、連句入門の手引き、連句概説、連句略史を付した。近代連句の状況を知る上で貴重なるものである。

## 収録項目例

《用語篇》 挙句 会釈 一座一句 有心 打越

思いなし 表八句 懐紙 歌仙 軽み 切字

景気 五句目 差合 去 式目 四春八木

《人名篇》 天野雨山 伊藤松宇 上田聴秋

鶴沢四丁 小林見外 下平可都三 関為山

高橋玄一郎 高浜虚子 中村俊定 野村牛耳

水原秋桜子編 二三〇〇円

俳句鑑賞辞典

貞徳・宗因から現在活躍中の俳人まで二七〇〇人の古典的かつ伝統的な名句一〇〇〇句を収め、豊かな実作の経験を生かし句作にも役立つ

水原秋桜子編 二八〇〇円

現代俳句鑑賞辞典

結社や傾向にとらわれず現代の代表的な俳人五〇五人の代表作一四六八句を収め、公平に客観的に鑑賞した。俳句鑑賞辞典の重複なし

大後美保編 二八〇〇円

季語辞典

日本の季節にまつわる言葉をスモッグ・不快指数などまで収録し、春夏秋冬の四季に分類した。気象学者の立場から厳密に季節を分類

中村俊定監修 四五〇〇円

難解季語辞典

古典俳句に使われる季語は今日では意味や表記が難解で正しい解釈や鑑賞ができない。本書はそれらの季語二千語を収め、解説を施す

国語学大辞典 B5 一九〇〇円

国語慣用句大辞典 B5 六八〇〇円

国語慣用句辞典 B6 二二〇〇円

国語史辞典 B6 三三〇〇円

日本語語源辞典 B6 一八〇〇円

京都語辞典 井之口・堀井編 B6 一八〇〇円

擬音語擬態語辞典 B6 三三〇〇円

隠語辞典 B6 三三〇〇円

近世上方語辞典 A5 一五〇〇円

花柳風俗語辞典 B6 三三〇〇円

明治新語俗語辞典 B6 三三〇〇円

難訓辞典 B6 三三〇〇円

名乗辞典 B6 三三〇〇円

名数数詞辞典 B6 四四〇〇円

あいさつ語辞典 B6 二八〇〇円

新版 ことば遊び辞典 B6 五八〇〇円

類語辞典 B6 二八〇〇円

類義語辞典 B6 三三〇〇円

新版 文章表現辞典 B6 二九〇〇円